

第1回 若手研究交流会報告

今回のテーマは「悩める若手研究者はいかにして未来を切り拓いてきたのか～キャリア形成に向けて～」で、6月4日（初日）の12時から13時の約1時間で開催されました。全体の構成は、まず、企画趣旨に関する話（野山）があり、次に、二つの小さな講演：①「研究的に生きるって何だ？」（南浦会員）②「博士号取得と就職および出産・育児の両立について」（小松会員）があり、その後、ネットワーキングランチ会（①4～6人のグループでの自己紹介、②グループトーク）、まとめ（総括的な話）という流れでした。

南浦会員の講演では、「若いうちは研究に専念しないとダメだよ。そのうち教育や大学運営で首が回らなくなるから」、「最近授業が忙しくて、研究ができない」、大学教員の間でよく交わされるこれらの言説の問題についての言及がありました。これらのことばは、やがて「自分の仕事は『研究』である」という感覚を生み出すこと、そしてそれ以外の教育や大学の運営のような仕事を「より面倒なもの」の位置に追いやり、やがてそれが、自分の「専門」の枠を固定化し、「研究」そのものを囲い込んでいく、というような危惧について触れました。これらの話は、小松会員の「研究と育児」の話題にも通じており、冒頭の台詞の「教育」を、「育児」に置き換えることもできるとの指摘がありました。また、そう考えると、人生における「研究」の幅の大きさや豊かさとは、「研究」を他のものと切り分けられないようにすることではないかという指摘もありました。教育、（組織、機関、学会等の）運営、家族、育児など、ありのままに受けとめて自分の「研究暮らし」のひとつ（一環）として捉えるという視点こそが肝要であるというわけです。

小松会員の講演では、1）博士論文の執筆から学位取得／妊娠から出産、2）就職活動と保活、3）現在の勤務と育児の3つの時期における自身の状況や課題、解決に向けた奮闘等について、当時の状況を振り返りつつ発表がありました。どの時期においても困難や問題に直面した際、指導教員、ゼミ生、家族や親戚など様々な人々からサポートして頂いたおかげで乗り越えられたこと、今後の課題は、周囲からのサポートに感謝しつつも自身も周囲の人々の支えになれるように、できること考えて行動すること等の話がありました。小松会員自身からは「今回の発表は自分にとって、これまでの状況を振り返り、気持ちを整理する良い機会となった。アンケートの中には発表に励まされたというコメントもあり、若手研究者ならではの悩みや課題を共有する機会を提供できたことを大変うれしく思う」との感想がありました。

その他、この企画に携わった文会員からも「自分も若手研究者として今後の自分のキャリア形成について悩んでいたため、自分の将来を考えるうえで大変参考になった」との声があり、アンケートの中には「若手研究者自身の話が聞けて嬉しかった」、「励まされた」、「人脈が広げられた」という意見が多く見られました。

今回は、若手研究者自身（2人）のキャリア形成経験の話を聴き、悩みを共有し、参加者同士でネットワークを構築する場の提供が出来ました。その意味で、非常に有益な時間になったと思います。

◆若手交流委員会◆野山 広（国立国語研究所）、小松 翠（お茶の水女子大学）

南浦 涼介（東京学芸大学）、文 吉英（お茶の水女子大学大学院博士後期課程）